

平成30年度 米沢市・学園都市推進協議会「地域と大学との懇談会」

# つながる若い力 まちに元気

米沢市の学園都市推進協議会(種村信次会長)による「地域と大学との懇談会」が去る1月11日、同市の伝国の杜で開かれました。山形大学工学部、米沢栄養大学、米沢女子短期大学への支援とともに、地域と大学、企業や住民との交流・連携強化に向けて、第1部「学園都市講演会」と第2部「トークセッション」の要旨を紹介し、地域と人材の関わり方やその活用方策を探ります。

## 講演

### 地域創生―為せば成る「ひと育て」「まち育て」

東京農業大学教授・博士(経済学) 内閣官房シテイイマネージャー

### 木村俊昭氏

私は一年中、全国を回っています。1泊2日、2泊3日と毎週のようには、今では年間230泊にも及びます。全国の自治体、地域、企業に触れ、これは素晴らしいと思える取り組みがたくさんあります。今、世の中の流れはこうあるのか。「気付いたら行動に、それを知恵に変え、集積させることが何よりも大事」だと思っています。人間誰しも、何かを成し遂げたいと思つたら自分なりのストーリーを描かなければなりません。成功へと導く脚本、戦略的ストーリーです。しかし、それだけでは足りません。「自分がやってみてどうだったか」、「実学」を教えてください。先生が必要で、その実学を何に学ぶか。私は、ま



ちの産業、歴史、文化を徹底的に掘り起こすようお勧めします。まず自分のまちはどんな産業で成り立っているか。1位から10位まで列挙してみよう。多くの人に給料を払い、税金をたくさん納め、付加価値の高い産業はどんな業種か。それを初めて次なる方策がストーリー化できるのです。まちの基幹産業が明確になったら、歴史や文化、自分たちは見落として、ほかの地域の人がびっくりにしてくれる景観など、五感分析を加えてその産業をさらに強くする一手を探ってみよう。弱みを克服しようとするよりも、強みをさらに伸ばす努力をすることが先決ではないでしょうか。もちろん、弱みを放っておくだけではなりません。弱みを補ってくれる新たなパートナーを探しましょう。企業誘致や起業支援を進める対象は、地元企業の声をよく聞き、どんな企業が最も助かるのかを考えます。一番に優先し、大切にすべきは地元の企業です。商店街は商店街、農村は農村というように、部分的にバラバラに動いては効果も台無しです。行政も、経済団体も、地域も、すべてが情報を共有し、役割分担をしながらまち全体を元気にする。すなわち、全体として最も優れたパフォーマンスを発揮できる「全体最適」の視点を大切にしてほしいと思います。「地域創生」の鍵は何といつても「人材(ひと)」です。一連のストーリーができたから、それを現実させるリーダーも欠かせません。「できない」を「できる」に変える、掛け算と成長思考の「増幅型リーダー」に期待します。大学進学、都会での就職など、多くの若者が古里を離れて行く中で、「いずれは戻りたい」と思わせる愛着心をいかに育てるかが大事です。そのためには、大人がこれまでも増して、地域の素晴らしさや自分たちの使命を、小中学生や高校生に話す、語り継ぐことが重要です。各世代が一緒に、まちの強みを生かして取り組めば若者は必ず戻ってきます。最後に、私は「まち育て」は「ひと育て」であり、「ひと育て」は「まち育て」

## トークセッション

### 若者パワーで地域活性!!

### 人が輝き、地域が繋がるストーリー

相田 自己紹介とこれまでの活動内容を教えてください。遠藤 天童出身で、米沢栄養大4年に在籍中です。米沢の学生と商店街をつなぐ「アットストリート」という団体で、イベントの企画や運営の活動をしてきました。春からは管理栄養士として市内で働きたいと思っています。高橋 米沢出身で、九里学園高を卒業して東洋大に進み、今3年生です。僕は東京の学生を米沢に連れて来て、こちらの地域活動に参加してもらっています。佐藤 宮城県丸森町の出身です。米沢女子短大から東京外国語大に編入し、3年生です。米沢で「アクセリリンク米沢」というサークルに入り、地域のお祭りの企画運営やボランティア活動に参加して来ました。お祭りには棒杭市や伝統市昔遊び体験などがあり、もちろん現在も仲間と交流しています。

つかけ、感じたこと、その体験を漢字1文字で表現してみてください。遠藤 きっかけは初めて米沢に来て、あいさつに行った隣の部屋から「サークルに入らない?」と勧誘されたことでした。先輩の笑顔がとてもすてきな印象的でした。私もこんな人になりたいと思いました。米沢に抱く漢字1文字は「原」です。源という意味が込められていて、生きるために絶対必要な、食、人、夢の三つを強く

た人がたくさんいます。佐藤 アクセルリンク米沢に入ってきたきっかけは、メインの秋祭りでした。私は人が集まるお祭りが大好きなので、一緒に面白いことがしたいと考えました。漢字1文字は「始」です。短大から東京の大学へと進みましたが、私にとっては「米短」が始まりです。東京に行つて一人じゃ何もできないと改めて感じています。米沢でつながって、今につながって、現在は日本地域創生学会の学生会会長も

どの強みを改めて知る思いです。相田 木村先生、コメントをお願いします。木村 さまざまな活動に参画する若者はまさに頼もしく思います。やはり自分たちの強みをどう伸ばすのか、そこを考えていきたいものです。中途半端にしないためには、目的、目標、使命を明確にすることが大事です。5年後、10年後、自分はこの地域で何をしたいのか、どんな役割を担っているか、最もモチベーションが上がるか、最もモチベーションが上がる

高橋 僕は米沢に対するイメージが変わりました。以前は「米沢牛」「上杉鷹山」ぐらいで…。でも今は、米沢の人がすごくあったかくて、さまざまな活動を通じ、地元への愛着が実感の伴うものになった。東京の学生とこちらに来て、ふだん体験できないこと、トラクターを運転したり、雪囲いを手伝ったり、スノーモービルに乗ったり、そうすることで、東京のメンバーも米沢に愛着を持つてくれる。一つの大きな家族のような体験を、本当に楽しく積んでいます。

鹿俣 米沢青年会議所の本年度理事長を務めさせてもらっています。米沢生まれの米沢育ちとして、仕事を持ちながら、会議所の仲間だけでなく、学生とも一緒にまちづくり、人づくりなどの地域活動を行っています。相田 皆さんが活動を始めたとき

感じます。私は地域活動の中で出会ったたくさんの人から、大切な夢をいっぱいもらいました。高橋 僕の活動のきっかけは大学受験の過程で知った「まちづくり」の言葉です。九里学園では海外でのホームステイや、沖縄の子どもたちとの交流事業などがあり、上京しても何かやりたいと感じていました。そして決めたのが「東京の学生を米沢に呼び込もう」です。僕の漢字1文字は「想」です。米沢には、この人のために、この人と一緒に、と想う心を持つ

担当させていただき、全国とのネットワークも広がっています。鹿俣 10年ほど前、何か新しい活動をと考えていたとき、当時米沢には音楽に関するイベントが少なく、音楽で盛り上げられないかと考えたのが毎年恒例の「米沢の夏まつり・ミュージックフェスティバル」につながっています。2015年からは実行委員長を学生が務め、青年会議所は後ろから支える形になりました。私が選ぶ1文字は「活」。学生、地域、それぞれが熱い思いを持って共に活動するこ

る姿を思い描いてください。相田 今の自分に感じることを、何が一番変わったと思いますか。遠藤 地域活動が本当に面白いと思えることです。米沢栄養大の学生は1学年40人ですが、大学の枠を超えている人々や出会い、前のめりになるぐらい積極的になったと思います。自分に求められるものと、やりきったときの達成感、その人(相手)を信じて一緒にやってみようというプラス思考の場が増えています。佐藤 人のパワーはすごいと感じ

鹿俣 学生と一緒にイベント活動をして感じるの、何と云っても若さです。その若さは、発想力や素直さにも通じます。学生が仕掛けてくれたものに触れて、その刺激が実に心地いい。学生がこのぐらいやれるんだから、自分たちも奮い立ちます。若い学生の参加が増えると、高校生も集まってくれます。ひいては中学生や小学生にも輪が広がるでしょう。地域と一緒に、幅広い年代と交流できる取り組みを、今後も続けていきたいと思っています。



- 「まち育て」と米沢について語り合ったトークセッション  
米沢市・伝国の杜
- パネリスト  
遠藤由佳さん 米沢栄養大4年 天童市出身  
高橋達也さん 東洋大3年 米沢市出身  
佐藤桃華さん 米沢女子短大卒、東京外語大3年 丸森町出身  
鹿俣貴裕さん 公益社団法人米沢青年会議所第58代理事長
- コメンテーター  
木村俊昭さん 東京農大教授  
相田隆行さん 米沢市総合政策課地域振興主査

## 講評・感想

### 連携し若者の力を生かす

学園都市推進協議会会長 種村信次氏

4人のパネリストの皆さんから、良い話を聞かせていただきました。米沢が大好きだと言ってもらえて、本当にうれしく思います。若者のパワーをまだ十分に感じていない市民がいるかも知れません。この力を今後どう生かしていくか。ますます皆が連携し、つながっていくことが大事だと思います。

### 地域の人材、地域で育てる

米沢栄養大学、米沢女子短期大学学長 鈴木道子氏

地域に必要な人材は、やはり地域の方々から育てて頂くことが何よりも大切であると実感いたします。学生の成長を見るたびに、米沢のような、こんなに学生に優しいまちがほかにあるだろうかとも感じます。地域への愛着は、大学生になってからでも十分に育つということを教えていただきました。

### 自分で立ち上げる力養う

山形大学工学部副学部長 野々村美宗氏

山形大工学部の強みは、一流の研究者を育てることにあると思っていますが、教育の仕組みも今は少しずつ変わってきています。それは、自分で何かを立ち上げる力を持つ人材を育てることです。ベンチャー企業ももはや学生主導でつくる時代です。われわれ教員も、学生に負けない取り組みが必要で

木村 自分が変わらなかつたら、相手を変えさせることなんてできません。「やらされてやる」のではなく、「やりたくてやる」の先に「地域創生」があるのだと思います。そうした意味で、「まち育て」はやはり「ひと育て」ではないでしょうか。そして、人の価値、地域の価値って何?と、もう一度真剣に考えてみたいものです。学生が大勢集うこの米沢で、大人も子どもも、皆一緒にくみしながらの地域活動がますます定着することを期待します。